

(26)レジ袋有料化論争

最近、レジ袋の有料化をめぐる、否定的な議論が展開されている。その中の 1 つにレジ袋を有料化してもごみの減量にならない、資源の節約にもならないという主張がある。

実際、各種アンケート調査などでは、「台所の生ごみを入れる袋に」、「ゴミ箱の内袋に」、「便利な袋として」利用するという回答が多く、「利用しないで捨てる」という回答は 1%にも満たないという結果が出ているという。このような回答の背景には、レジ袋を日頃持ち歩いて再利用してから最後にゴミ袋として利用するという、グリーンコンシューマーの知恵も生かされているので、レジ袋は買物の後でも簡単にはごみとなっていないようだ。さらに、再利用されるレジ袋に変わって新しいゴミ袋が利用されると、結局、二酸化炭素の排出量の削減や、資源の節約にならず、いずれ、消費者は経済的負担だけが増えて、環境保全には繋がらないことに気づくというのである。

アンケート調査の結果は、消費者の「もったいない」精神があり、感心させられるが、しかし、買物のたびに「もらう」わが国で年間約 300 億枚にも及ぶレジ袋は、必ずしも常に有効に利用されているとは限らないのではないだろうか。というのは、無料と有料のゴミ袋の違いは、後者は目的を持って購入するのに対して、前者は「ただ」のものを「可能な限り」利用しようということにポイントがあるからである。実際、ゴミ袋はごみを家庭で貯蔵、あるいは回収時に詰め込むという目的で購入するので、回収頻度やごみの量、そしてごみの削減にあわせて一定の容量のゴミ袋を購入するので、ごみの容量とは無関係にたまってしまいうレジ袋とはおのずと役割が異なる。レジ袋がたまると、少量のごみでもゴミ袋として利用することに全く抵抗はない。レジ袋をゴミ袋として利用してきた人が、ゴミ袋購入派に変わったとき、プラスチック袋の利用量が減ったことに気づくと思うが、いかがであろうか。この種のアンケート調査は行なわれているのだろうか。

この点は容器包装一般にも通じることである。たとえば、ペットボトルを水筒に再利用する場合のように、消費者が消費後の容器を有効に再利用することは十分に考えられるが、しかし、消費者はペット容器を、目的を持って「購入」したのではない。ペットボトル等の容器は再度、容器としてリユースするのが望ましいことは明らかであろう。レジ袋論争を通じて、環境に配慮する買い物のあり方、消費のあり方を考える機会になるとすれば、買い物を通じて環境意識を育む大事な一歩になるのではなかろうか。

以上